
ここからいったいどうしろと！

青春バイブル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここからいっただうしろと！

【Nコード】

N2140K

【作者名】

青春バイブル

【あらすじ】

この作品には、オリ主、チート、原作ブレイク、ご都合主義が含まれます。それが嫌いな方はBACKを推奨します。

この作品は駄文です。

それでもいいという猛者は、ご覧ください。

ああ、これが噂の……（前書き）

はじめまして。青春バイブルと申します。

このたびはこのような駄文に付き合っていただき誠にありがとうございます。

ことの発端は、作者のチョットした思いつきです。

批判、中傷、アドバイスなんでもください。

作者は素人ですのでお手柔らかに。

はじまりはじまり

ああ、これが噂の……

気がつけばおれは見知らぬ湖にいた。

「何処だここ？」

辺りを見渡しても

「おかしいな、確か昨日はちゃんと自分の部屋で寝たはずなんだが……」

というよりここは日本なのか？等と存外冷静に考えていると、

『気がついたか？』

目の前に突然老人が現れた。

「うおおい！？どっから出てきやがったんですか！？？」

なんだか日本語がおかしくなってしまった。

『少し落ち着け。』

老人の言葉で少し冷静になって改めて質問してみた。

「すみません少しとりみだしました。で、ここは一体どこであなたは誰でどうして俺はここにいますか？」

おれはとりあえず手当たりしだいに聞いてみた。

『そう急ぐでない。で、第一にわしは神だ。』

それを聞いておれは一瞬呆けた。

「マジで!？」

驚きながら問いかけた。

『マジじゃ』

老人の即答が妙に信憑性を持っているため、俺は半信半疑にだが会話を続けることにした。

「で、その神さんが俺ごときに一体何の用なんだ? つか俺って一体今どうなってるわけ?」

再びおれは自分の現状を聞いてみると

『それがのう……』

と、神さんは言葉を濁した。

『誠に申し訳ないんじやがお主はこちらのミスで肉体を失ってしまったんじや。』

???? いったいどゆこと????

『まあつまりは部下の死神がちょっとミスをやらかして誤ってお主の殺してしまったんじや。それでなんとか魂だけでも、こちらに

連れてきて現在に至るわけなんじゃ。』

と神さんは非常に申し訳なさそうに事情を説明した。

「簡単にいえば俺って死んじやったわけ？」

とりあえず簡単にまとめてみた。

『つまりはそういうことじゃ。』

そっかぁ俺死んじやったのか。

「それで俺はこれからどうなるわけ？このまま天国やら地獄に行くの？」

『それ何じゃが、お主が望むなら新たな肉体を与えて別の世界に送ろうと思うんじゃがどうする？もちろん何らかの力がほしければそれも叶えよう。』

なんとチートオリ主フラグ！！

「マジか！？」

『うむ。なんでもいつてみる。』

「じゃあさ、俺にアル」アジフとデモンベインくれよ！術式は全部頭ん中に送った状態で！武器は名前呼んだら召喚できるようだね。それとデモンベインはでかすぎるからマギウスタイルからの追加装甲と本体召喚で分けてくれ！」

でもそれだと闘う相手全員殲滅しちまいそうだなあ……そうだ！

「あと、攻撃をリリなのみたいに非殺傷もできるようにしてくれ。」

『ではそれで終わりか？』

「最後に、最低限生活できるように俺とアル・アジフの家と戸籍、最後に金をくれ。」

『なかなかシビアじゃが仕方ない、リュックにつめて送ってやろう。』

あれ？そういえば俺は何処に送られるんだろう？

『それでは送ろう！場所は魔砲少女な世界じゃ！』

「ちよっつおまー！」

俺はこの世界から消え去った。

ああ、これが噂の……（後書き）

やっちまっ
たぜ！

取りあえず荷物を……（前書き）

テレマーク（／／／）が気づけばおかしいことになっていたの
で訂正します。

取りあえず荷物を……

「ここは……公園か？」

気がつく俺は夜の公園にいた。とりあえず持ち物の確認をしようとする。俺はページの嵐に巻き込まれた。

「なんだこれは!？」

するとページは一ヶ所に集まり発光。

気がつけば一人の少女となった。

腰まで届く綺麗な銀色の髪

雪のように白い肌

意志の強そうなエメラルドグリーンの瞳

その姿はとても幻想的で美しかった

「初めまして。妾の新たな主」

その声は鈴の音のように響いた。

「アル……アジフ？」

「その通り！妾こそ『死靈秘宝』『ネクロノミコン』『魔物の咆哮』
すべての魔導書の母にして外道の知識の集大成アル・アジフだ。」

「それでは主、まだ汝とは完全な契約をしておらんな。名を教
えてくれんか。」

「俺の名前は悠斗 中村 悠斗。」

「そうか。ならば中村悠斗。
妾は汝と契約する。」

少女が俺の頭を、自分の目の前に寄せた。

儚くて、柔らかい感触。

触れ合う唇と、唇。

その瞬間、俺たちはまばゆい光に包まれた。

「くっ……!？」

光の洪水が辺り一面を白く染め上げる。

目を開けられないほどの先行。白い闇。

その中で俺は少女の声を聞く。

「中村悠斗。今一度我が名をしかと心に刻み込め。わが名は『アル・アジフ』！」

アブドウル・アルハザードによって記された世界最強の魔導書なり！」

——久遠に臥したるもの死する事なく
That is not dead
which can eternal lie.

怪異なる永劫の内には死すら終焉を迎えん——
And with str
ange aeons even death m
ay die.

光の洪水が収まる。

そこには身体にぴったりとフィットした黒いボディースーツを身に着けている悠斗。

彼の背後にある翼をよく見ると本のページを束ねたような構造になっていて、そこにはびっしりと魔術文字が書かれている魔導書のページそのものだった。

日本人特有の真っ黒な髪の毛は真っ白になり腰のあたりまで伸びている。

そして彼の両目は、片方は血のように真っ赤な赤と闇のようになんとも暗い漆黒。

「これがマジウスタイル…。」

つと 少し感動して呆けてしまった……つとそついえばアルは？

「此処だ。 此処」

耳元で声が聞えた。

その声を使いりに方の辺りを見る。

そこには先ほどの美少女ではなくマスコットのようにデフォルメさ

れた少女。

その服装は俺の翼のようにページを重ねて作られているワンピース。

そして同じくページを重ねて作られている帽子。

そしてなぜか両手に装着された猫の手……

もはや原形を留めているのは銀色の長髪とエメラルドグリーンの瞳だけだ。

「えらくかわいらしい姿になったな。」

「か、かわいらしいだと！？たわけたことを言っな！！
／／／
」

アルは真っ赤になってどなり散らす。

「ごめん、ごめん。」

なんだこいつ？照れていんのか？

「まあよい。それでどうだ？汝の魔力は元々結構あつたがさらに増えたぞ。」

「ああ、さっきよりこう……力があふれてくるのがわかる。さすがだな。」

「そうであろう。なんといっても妾は最強の魔導書なのだから。」

とアルは自信満々に言う。

そんな風に会話をしていると……

「つつつつ！悠斗！防御結界を展開しろ！」

「んな！」

辺りに響く爆発音。

突然のことで俺は全く反応できなかった。

「なかなかの魔力を感じてきてみたのだがこれは……。」

俺たちは声の聞えた方向へ顔を向ける。

そこにいたのは白の外套に白銀の剣を持った騎士甲冑姿の女性。

「お前たちに恨みはないが、我が主のためだ……その魔力、貰いうける！」

ヴォルケンリッター烈火の将『シグナム』！

「くっ！結界ですでに閉じ込められたか！」

「悠斗！いきなりだが戦闘開始だ！いくぞ！」

取りあえず荷物を……（後書き）

別視点での書き方が分からない（TOT）

キャラクター紹介？（前書き）

問題が発生した。

いや、すでに問題だらけなのは知ってるんですがね。

何というか収拾がつかなくなってきたというわけで、
キャラクター紹介です。

感想なんでもいいんで、くれると作者が跳ねます。

キャラクター紹介？

主人公

名前：中村悠斗

年齢：19歳

格好：ぶっちゃけてしまつと大十字九朗です。その方がイメージイメージがきくと思い……スイマセン作者のイメージ不足です。ですがその九郎を10歳前後にしていただけといいです。

補足：今回死神のミスにより転生を果たした主人公。性格は穏やかでO H A N A S H I 等は苦手であるが、気が付いたら厄介事に巻き込まれるかわいそうな子。戦闘面ではなかなか主人公補正が輝いている。『リリカルなのは』は、二次小説しか知らない。

ヒロイン（笑）

名前：アル・アジフ

年齢：約1000歳

格好：第一話参照　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい手を抜いてスイマセン

銀髪に白のフリフリワンピースを着たツルペタ！！

補足：普段は少女の格好をしているが、その正体は最高位の魔導書。『ネクロノミコン』『死霊秘宝』様々な呼び名がある。彼女いわく、「妾ほどの魔導魔になれば命を持ち、魂の器たる肉体を持つのは当然だ。」とのこと

デモンベイン

装甲に特殊合金ヒイロカネを用い、何重にも魔術的防御が施されているため、通常兵器では傷一つ付ける事ができない。破壊ロボの必殺技「ジェノサイド・クロスファイアー」をうけてもびくともしない高い防御力を持つが、作中では敵の攻撃力が非常に高いため硬いというイメージはあまり無いようである。また、強力な防御陣を展開したり、後半になると自己修復ができるようになる為か、装甲の重要性をあまり感じさせない。「獅子の心臓」と呼ばれる魔道機関により搭乗する魔術師の魔力によって動き、全体に魔力を供給する為に伝導率の高い水銀を血液のように張り巡らせている。

ういき参照

読むのが大変？　つまりはスーパーロボットです。

補足：今回はでか過ぎる彼に出番はなく？追加装甲という形で登場してもらったことにしました。

破壊ロボ：西博士が作ったドラム缶ドリル。

作者（笑）

名前：青春バイブル

作者は専門学校生。入学一年目にしてすでに留年の危機を迎える。最近の悩みはどうやってこの赤点の嵐を乗り越えるか、である。今回の作品については、先日とうとう買ってしまった初めてのエロゲーをやっていて「あれ？デモベトリリカル行けんじゃね？」などと無謀なことを考え付きやってしまった。後悔はした。反省はしない。

補足：作者は全くと言っていいほどの初心者。作者は実はリリカルなのは本編を一話も見ることがない。映画のDVD化を待っています。この小説はノリと勢いでできている。

P.S. こんな作者ですが生ぬるーい目で見守ってください。

常に読者の皆様に今後をどうすればいいかを求めています。

読者の助けが作者に次の話を書かせます。

どんな批判、でも受け付けます。

その中に次はこうしたほうがいいよ。と、アドバイスをそつと、
ください。

キャラクター紹介？（後書き）

書いて見せます勝つまでは！

これが主J……（前書き）

こんにちは、青春バイブルです。
気がつけばすでに何人かお気に入り登録していただいていました。
こんな駄作者と駄文ですが、これからも皆さんの応援を糧に頑張っ
ていきます。

それでは、

はじまりはじまり

p s ・感想待ってたりしてます。

「これが主」……

「はあああああ！」

一気にこちらとの距離を詰めてくるシグナム。

「来るぞ悠斗！構えろ！」

確かシグナムは、接近戦を得意とするオールラウンダー。
ならば、接近戦に持ち込まれるとこちらに勝ち目はない。策を考えねば。

「マギウス・ウィング！」

俺はすぐさま背中の翼を刃に変えて、マギウス・ウィング迫りくる剣戟に備えとようつする。

だが――

「なっ！」

何とか今のは防げた。だが、先ほどの一撃でマギウス・ウィングに罅が入り砕けてしまった。

「ちっ！ありえねえだろ、これでも銃弾を軽く弾き飛ばすほどの強度を持ってんだぞ！？」

「ふむ、今のを防ぐか。だが次で終わりだ！」

やばい、来る！

「悠斗！これを使え！」

アルが叫ぶと、俺の手に一本の剣が現われた。

俺は躊躇することなく、その剣をシグナムの剣に向けて振るう。

ガキンッ！

響く剣戟。お互い弾かれ距離をとる。

「バルザイの偃月刀か！サンクス！アル！」

「知っていると思うが、そいつは剣としても優れているが、『魔法使いの杖』の役割も担う。これがあれば汝の魔力を何倍にも増幅させる。」

「至れり尽くせりだなっ」と!

俺はバルザイの偃月刀を構え、相手を見据える。

再度来るシグナムの一撃をかわし、バルザイに魔力を込め

「おらよ!お返しだ!」

シグナムに向け放り投げる!

その瞬間、バルザイは発火し出し、まっすぐシグナムに向かっていく。

「くっ!」

シグナムは驚きながらも冷静に受け止め、弾こうとするが、バルザイの偃月刀が触れた瞬間

ドガアアーン！

爆発した。

「おいおい、バルザイの偃月刀にあんなエフェクトあったかよ？」

「いや、あれは妾がバルザイの偃月刀を魔力に還したただけだ。本来ならあれほどの威力にはならんが……汝の込めた魔力がいささか多かったんじゃろうな。」

まあ、これでやつも無事ではあるまい。」

アルはドヤ顔で、こちらを見てくる

「武器を魔力に戻して爆発って……」

（どこの弓兵だよ。（）そんな事を思っているぞ。

カートリッジ ロード

『explosio

こ』

辺りに響く機械音

「最初に見たときはただのひよっこに見えたが、その本性はなかなかの戦士だったか……。」

まだ残る砂煙の中で聞こえてくる女性の声

「すまなかった。改めて名乗りを上げよう。」

先ほどよりも一気に増幅した魔力量

「我が名はヴォルケンリッター烈火の将 『シグナム』！そしてこの剣が我が相棒 『レヴァンティン』！」

「いきなり魔力量がいつきに上がった！？あやついったい何をした！？」

突然跳ね上がった魔力量に警戒するアル。

ああ、そういえばアルは、こっちのことなんも知らなかったなあ

「——紫電一閃——」

彼女は燃え上がる刃をかまえてこちらを射抜く

「悠斗！あれを食らうのはまずい！」

アルの声が若干焦っている

「わかってる！」

こちらにも迎撃態勢に入るが、雷光の様な一撃は、防御結界も身体を覆うように展開したマギウス・ウィングも軽く無視して衝撃が走る……

だがっ！！

パリンッ！

「なっ！」

驚くシグナム。

無理もない、シグナムが攻撃したのは、俺たちではなく鏡

『ニトクリスの鏡』つまりは幻影

「悠斗！」

叫ぶ
アル

「わかってる！」

答える
俺

「「アトラック・ナチャ！」」

俺の髪がクモの巣のように伸びていき、シグナムを捕らえようとするが、それを上空に、逃げることでかわす。

「ちっ
」

思わず舌打ちがこぼれる

ならばこちらも！

「マギウス・ウィング！」

マギウス・ウィングを復元させて空へ羽ばたく

「バルザイ！」

俺は再びバルザイの偃月刀を顕現させる。

「ハアアアアアア！」

「ウオオオオオオオ！」

空中で何度か切り結ぶ。

「ドラァ！」

「フッ！」

お互い鰐迫り合いになり膠着してしまう。

「てめえ！なんでいきなり俺たちを襲った！？」

「聞きたければ力ずくでやってみろ！」

「上等だ！こっからはこっちも全力で行く！」

罅迫り合いから一気に距離をとり

「来い！イタクア！」

俺の右手に現れたのは回転式拳銃『イタクア』マテバオートマチック
クカスタム。

銀色の非常に流麗なフォルムを持つ風の神の祝福を受けた・46口
径「ウエンデイゴ」を駆するモンスターハンドガン。

この銃は自動照準機能があり相手の急所を的確にかつ確実に破壊
できる。

術者は弾丸と思考をリンクする事ができ、弾道进行操作する事が可能
である。

「アル！制御は任す。」

「うむ！」

マズル・フラッシュ。

銃声は4つ。

だが肝心の弾は掠りもせず避けられる。

その瞬間再び切り結びにかかる。

「ただの威嚇か？」

「あめえよ！」

顔がにやける。

「なっ！」

驚くのも無理はない。先ほどあらぬ方向へ飛んで行ったはずの銃弾がすべて戻ってきて、そのすべてがシグナムを狙っていたのだから。

「レヴァンティン！」

剣から薬莖が1つ吐き出される

『P a n z e r g e i s t』

「みたか？悠斗。」

「ああ……直撃する寸前に剣から薬莖が出たな。」

「おそらくあれは魔力タンク。しかも、かなりの高密度だ。」

「……………」

流れる沈黙。それを破ったのは

「レヴァンティン！」

「B o s s e n f o r m」

一気に吐き出される二つの薬莢。

「アル……神獣形態を使う」

「まで！あれでは威力が高すぎる！」

「大丈夫だ。手加減はする。」

頭を切り替える。

どこまでもおのれの闘志を上昇させていく。

その反対に、どこまでも頭の中はクールに。

スイッチが入る。

魔術を構成する式が未だかつて無いほど秩序だって、動き出した。

魔術にとって必要なのは冷たい興奮。

ウト、
……

——フングルイ、ムグルウナフ、イタクア、ナムヌハ

悠斗の詠唱が詠われるにつれて急激に下がっていく気温

——翔けよ、隼

お互いに魔力を昂らせ、武器を手取る！

「
「
「
な
っ
！
」
」
」

「
っ
っ
！」

突然の激痛。そしてよく見ると俺の心臓の辺りから腕が飛び出している。

「悠斗——！」

アルの叫び声が聞こえるが、あまりの激痛にもう意識を保ってられない

ちくしょっ……

落ちてゆく……

これが主」……（後書き）

とりあえずこれで今あるストックがなくなりました。 今後はカメラのような更新速度になる可能性が高いのですが、作者はあきらめずに書いていくつもりです。 一応、文章の構想は降りてき始めたのでいけると 생각합니다。

誰に奴を拾ってもらうか

只今絶賛気絶中です (前書き)

皆様お久しぶりです。

ようやく作者は追試の嵐を終えました。

できる事はした。これで落ちたらなける。

なんてことを思いながらログインすると

10,000PV1500ユニーク突破・・・・・・・・・・・???

(;。A)・・・。

これが魔砲の力……

皆さんほんとにありがとうございます！

これ彼も作者こと青春バイブルは頑張っていきたいと思えます。

てな訳ではじまりはじまり

只今絶賛気絶中です

公園の上空にいる3人

一人は体格のいい仮面をつけた男

一人はその男に胸を貫かれ気絶している少年

一人はいくらか傷を負いながらも、怒りの形相で男をにらみつける女

仮面の男は少年から銀色の発光体を取り出し、女に言う

「さあ、鬼集しろ。」

その言葉に女は反応し、口を開こうとする。

「悠斗から離れろ！このうつけが！」

少年にくつついていた。マスコットの様な少女の発言とともに放たれる衝撃波。

その衝撃により仮面の男は吹き飛ばされ、その拍子に少年を手放す。

S i d e ア ル ・ ア ジ フ

くそっ！

妾がもっと注意していればあのような事に等ならなかった。

落ちてゆく悠斗を追って……

「捕まえた！」

このまま転移で離脱を！

「させるか！」

「くうつつ」

再び襲いかかる仮面の男の射撃から悠斗を守るために直撃を受ける。

「貴様の様なやからに悠斗はやらせん！」

「ぐあっ！？」

辺りに強烈な閃光が走り、二人は思わず目を閉じてしまう。

再び目を開けると、そこには誰もいなく、辺りには、本のページが舞っているだけだった。

S i d e ? ? ?

「はあゝ。シグナムは何処まで買い物に行ったんやろ？」

溜息をしながら心配そうに呟くはやてちゃん

「そうですねえ。ここまで遅くなるのでしたら連絡の一つくらい入れてくれればいいのに」

ホントにどうしたのだろうか？念話を送るも反応はないし……

もしかして管理局に捕まったとか？いや、シグナムならば囲まれる前に必ず気づいて離脱するはず。それにこの間の高機動戦を得意とする金髪の子は、デバイスの破損がかなり酷かった。短期間での復帰は不可能だと思う。

だったらなにが……

「——ル」

「シャルってば！」

「はっ、はい！どうしました？はやてちゃん？」

いけない！思考に浸りすぎてた。

「どうしたも、こうしたも、シャルこそどないしたん？ずっとボ——として。何か心配ごとでもあるん？」

「いえ、なんでもありませんよ。ただ、シグナムはどうしたのかな——って。」

「そっか？でもシグナムはホンマにどないしたんやろか？事故とか

に遭ってなかったらえんやけど……。」

今の私たちは本当に幸せだ。

優しい主、穏やかな生活、幸せだと思える時間。

きつと今まで私たちが本当に望んでいたものをはやてちゃんは全部そろえてくれたんでしょね。

ヴィータちゃんもシグナムもザフィーラも皆が笑っていた。

そしてこれからもずっと皆が笑っていられるように……

だから私たちは、この恩に報いるために闇の書を完成させて、はやてちゃんの体を絶対治して見せる。

ざあ、ざあ、ざあ……

何かを引きずる音。

それに気付いて私とはやてちゃんは音のほうへ目を向ける。

そこにいたのは白い少女と気を失っている少年。

少女は少年を必死に支えているが、今にも倒れてしまいそうだ。

「だれか……だれか悠斗を」

そう言つて少女も気を失つてしまった。

「ちょ、大丈夫ですか!？」

はやてちゃんがあわてて近づく。

「シャマル!急いで家につれていくで!手伝つて!」

「は、はい!」

はやてちゃんに続いて私も急いで近寄っていく。

「!?!?」

魔力反応!?!? この子たちは一体……

S i d e o u t

只今絶賛気絶中です（後書き）

というわけで、

あえて、八神さんちのはやてちゃんに拾ってもらいました。
さてさて、これからどうしよう。

シグナムせっかく出したのに空気だし

この作品の題名は作者の叫びでできてます。

次ぎ合った時は……（前書き）

こんにちは青春バイブルです。

皆様のおかげでPVは15,000、ユニークは2,500を突破し、着々と伸ばしていております。

誠にありがとうございます。

ここからが本題で、この先どうすればいいか作者は詰まっております。

どなたでもいいので感想などでご助力いただけると助かります。

それでは、はじまりはじまり

次ぎ合った時は……

S i d eアル・アジフ

「うーん……」

朝日の日差しに目が覚める。

気が付くと見知らぬ部屋にいた。

どうやら、あやつ等からは逃げ切ることが出来たようだな。

「それにしても此処は？」

がちゃ

ドアが開くと一人の女性が入ってきた。

「あつ、気が付きましたか？」

「お主！一体何者だ？」

「昨日のことは覚えていないんですか？突然、男の子と女の子がボ

口ボロの状態で見られて大変だったんですよ。」

「ということはお主らが妾たちを助けてくれたのか。すまん……昨日は意識が朦朧としていてあまり覚えておらんだ」

「まあ仕方ないですよ。それより容態はどうですか？二人してボロボロだったんですよ？」

「ああ、だいじょ……ゆうと！悠斗は何処だ！？無事なのか！？」

「きゃっ！？お、落ち着いて。悠斗って昨日の男の子のこと？」

「そうだ！いったい何処におるのだ！？」

「彼なら大丈夫。すぐ隣の部屋だから案内するわ。」

「すまぬな、えーっと汝の名はなんと言っ？」

「ああ、そいえば自己紹介がまだだったわね。私はシャル。」

「そうか。妾の名はアル・アジフよろしくたのむ。シャル。」

「ええ、アルちゃん」

お互いに自己紹介を済まし、シャマルに連れられて悠斗がいる部屋に行く。

その部屋で眠る悠斗を見て妾は思わず寝ている悠斗に抱きつく。

頭の中でめまぐるしく思考が回る。

ああ、此处にいた。

大きな傷はないのか？

生きていてくれて良かった。

もっと妾が周りに気を配れば。

・ ・ ・ ・

妾は一体どうしたというのだろうか？

この様な、会って一日もたっていないような小僧なのに、

こんなにも妾の頭は、気持ちには、心は悠斗であふれている。

涙が止まらない。

S i d e ア ル ・ ア ジ フ

S i d e 悠斗

目を覚ますとアルが胸元で泣いていた。

「おい、なに泣いてんだよ。」

「うるさい！このうつけが！」

「どうしたんだ？」

「うるさい！この、うつけうつけうつけ！大うつけが！」

「心配させてごめんな。俺、もう絶対あんな奴らに負けないから……。もっと強くなるから……。」

「あたりまえだ！汝は、妾の主『マスター・オブ・ネクロノミコン』なんだ。次にあの仮面の男に会ったら、生きてきたことを後悔させてやるぐらいぶちのめすぞ。」

「わかってる。でも……今だけは泣いてもいいかな？もう二度と……泣かないからさあ……。」

「ああ。今回だけで、もう二度と泣かぬように、ともに強くなろう、悠斗。」

俺は泣いた。

アルに抱かれて泣いた。

もう二度と負けないように……

「あの……もういいかしら？」

泣いて数分たったところに突然声がした。

「「あつ」」

完全に気が付かなかった。というか、この人いつの間に？

「最初からいましたよ。」

なんだと！？ということとは……

俺とアルは顔を見合わせる。

アルは顔が真っ赤だ。きっと俺も……

「いいですよーどうせ私なんて影薄いですよー」

なんかいじけてる。

次ぎ合った時は……（後書き）

というわけでアルにフラグをぶち込んでみました。

強引すぎたかなあ……

そして、猫姉妹への死亡フラグ……

これからどうしよう。

皆さんの意見を参考にしてみたいので、感想待ってます。

この作品の題名は作者の叫びです。

説明会（見なくてもいいよ）（前書き）

というわけで、感想が来ません（T―T）

これからどうしよう……な作者です。

今回は、デモンベインについてです。

いろいろ突っ込みたいところがあると思いますが、怒らずにご覧ください。

説明会（見なくてもいいよ）

今回は、デモンベインがわからない人たちのために、悠斗君の使った武器やデモンベインの概要を簡単に説明です。

まずはデモンベインとは？から

デモンベインは、2003年にニトロプラス（Nitro plus）が製作した18歳未満は、見ちゃだめだよ！な作品でした。それが第一作目『斬魔大聖デモンベイン』（馬鹿みたいに燃える作品です。）

ですがその後、あまりにソフトがバカ売れ？（詳しい話は、知りません）

まあ、なんやかんやあったんでしょう。2004年PS2で『機神咆哮デモンベイン』が発売されました。

内容は、斬魔大聖とたいして変わりませんエロスがないくらい？

こうなったら、とことんやるぜ！ということとで2006年に機神咆哮のアニメ化が決まりました、このアニメが何んとも大変！ラストなんかデモンベインをplayしたことない人には、理解できるものではありません！

なんというか……アル・アジフ√をtrueエンドと、goodエンドをクリア人でないと「ヒヤッハー！わけわかんねーぜ！」ってなります。

そして、同じく2006年『機神飛翔デモンベイン』が発売されました。

この内容は、機神咆哮、または斬魔大聖のその後を描いたもので、3D格闘ゲームになっちゃいました。（笑）

この作品は……ノーマコメントで。実は作者、まだやったことがあります。

すみません

よって今回の小説では、機神飛翔なネタはあまり詰める気はありません。

で、前回までで、悠斗君の使った武器や技についての説明です。

『マギウス・ウィング』

これは、マギウス・スタイルの時に、腰の辺りから生えるページでできた翼です。

読んで字のごとく、空を飛べたりしますが、応用もしやすく、翼を鋭くして刃にしたり、拳にして「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄……」

つてなことができたり、ページをばらまき、それを発火させたりもできます。

『バルザイの偃月刀』

アル・アジフの断片に記されている武器の内の一つで、本編でもあったように、武器としても優れているが、その本質は、魔法使いの杖であり、儀式用のものでもある。その刀身に魔力を込めれば、発火したりします。前回の爆発は、作者の考えたオリジナルですので、

あしからず。

『ニトクリスの鏡』

これは、古代エジプト第6王朝の女王ニトクリスが用いたとされる鏡。悪鬼や食屍鬼の姿が鑄込まれた青銅製の鏡であり、その効果は、相手に幻影を見せることや、応用として全身や武器に装備して、ミラーコート役を果たし、ビーム等の、反射を可能とした。（魔法はどうだろう？）ちなみに、使用者が暴走すると、現れた幻影たちが、実体を持って暴れたり、なんてこともある危険なもの。

『アトラック・ナチャ』

これは、悠斗たちが、唯一持っている捕縛用結界。その効果は、自身の髪をクモの巣状に伸ばし、捕縛することができ、込めた魔力によりその強度を変えることができるが、魔力持ちには、力技で解かれたりもされる。広域のバインドだと思えばいいかと。そのモデルは、人間と同じくらいの大ささの蜘蛛で、昆虫の器官を多数もっている。真紅の目を持ち、体は黒檀色の毛で覆われ丸太のような脚を持ち、甲高い声を出すとされる。

『イタクア』

回転式拳銃『イタクア』マテバオートマチックカスタム。銀色の非常に流麗なフォルムを持つ風の神の祝福を受けた、46口径「ウェンディゴ」を駆するモンスターハンドガン。この銃は自動照準機能があり相手の急所を的確にかつ確実に破壊できる。術者は弾丸と思考をリンクする事ができ、弾道を操作する事が可能。

この銃自体は、デモンベイン作中に存在する、『暴君』の銃で旧支配者でもある、イタクアをその中に封じ、魔術兵装として、その力を使用可能とする。

イタクアは氷でできた竜をイメージしてください。

今回は、イタクアの召喚時の呪文がなかったので、オリジナルで入れました。

説明会（見なくてもいいよ）（後書き）

20,000PVと3,000ユーロ突破しました。

こんな駄文に付き合っていたいただき、ほんとにありがとうございます。

こうして始まる……（前書き）

更新遅れてスイマセン青春バイブルです。

三月は凄まじかったです。特に日本橋！しかもそこで月箱なんか見つけてサー大変！月箱買ったやいましたーってほくほくしてたら今度は数量限定魔導合金デモンベイン劇中カラーが80000円元値が300000円名だけに即買いと……

スイマセン唯の言い訳でした。これからは学校が始ったり、仕事があったりと更新が不定期になりますが、なんとか完結に持っていますのでよろしく願います。

ps・30000PV5500ユニーク突破ありがとうございました。
す。

こっして始まる……

「いきなり取り乱してしまつてすまなかつた。」

あの後いじけてしまった女性を何とか立ち直らせたは良いものの、先ほどやり取りを見られて俺とアル二人揃つて真つ赤だ。

「いえいえ、アルちゃんもよっぽど悠斗君のことを心配してたみたいです。」

と、苦笑いを浮かべている。

「危ないところを助けてくれてありがとうございます。」

「いえいえ、困った時はお互い様ですし、それより身体は大丈夫ですか？」

「はい、おかげさまで。」

「お主がおらんかったら妾らはおそらくそのまま力尽きておつたらな。この恩は必ず返そう。」

「いえ、そんな大きくとらえないください。それに最初に気付いたのは、はやてちゃんなんでお礼ならはやてちゃんに言うてください。」

「はやて？」

とアルが聞こうとすると

「シャマル——！なにしとんのや？ご飯もつできたで——！」

「はい！今行きます。はやてちゃんも呼んでるみたいなんで一緒に行きましょうか。」

やばい……………

「どうした汝？顔色が悪いぞ？まさかまだどこか痛むのか？」

とアルが俺の顔を見て心配している。

「いや、大丈夫だ……」

（全然大丈夫じゃねえよ！やばいやばいやばいやばい！なんでもこうなった？なんでヴォルケンリッターに襲われたのにまた別のヴォルケンリッターに助けてもらってんだよ！？？馬鹿なの？死ぬの？ああもうあり得ねえ！会っじゃん！絶対会っじゃん！シグナムとのエンカウント率100%振り切ってるよ！どうしろと！？ここからいっただうしろと！）
と、暴走していると

「シャマル何してんだよ！はやての飯が冷めちまうだろ！」

エターナルロリータ2ことヴィータですね。わかります。（ちなみに1は、もちろんアルのことだ）

「ごめんなさいヴィータちゃん。それとはやてちゃん、昨日の二人が目を覚ましましたよ。」

「ホンマに！？」

アルと俺が声の主に顔を向けると、車椅子に乗った少女がうれしそうな顔をしてこちらを見る

「お主がはやてか。妾の名はアル・アジフ汝のおかげで妾も悠斗も助かった。」

「俺の名前は中村悠斗だ。助けてくれてありがとう。」

と俺とアルは自己紹介をする。

「どういたしまして。まあ、困った時はお互いさまや。私の名前は八神はやてつていいいます。よろしくな！」

「それでこつちがヴィータで、あつちがシャマル。あともう一人と一匹がおるんやけど……」「主はやて、ただいま今戻りました。」お！ちょうど帰ってきたみたいやな。」

はやては声のするほうへ顔を向ける

「ん？この声は……？」

と、アルが首をかしげる。

ガチャとドアが開くとそこにいたのは昨日到着したばかりの俺たちいきなり襲ってきた辻斬りの将の姿

「こ奴は昨日の！？悠斗構えるんだ！」

突然のアルの怒声にはやて達が慌てる

それもそうだ。ついさっきまで仲良く家族の紹介をしていたのに、いきなり臨戦状態である。そしてその怒りの対象のシグナムはこちらを鋭い目で睨んではいるが、状況を理解できていない。

「貴様ら一体何者だ」

「ほう、昨日の今日で我らを忘れるとはいいい度胸をしておる……悠斗、行くぞ！」

「おう！（もうどうにでもなれ！）」

俺とアルが発光し、俺達はマグウス・スタイルに変わる。そして、それを見た周囲が様々な反応で驚く。

「なっ！貴様らは昨日の！」

俺達の事に気付くシグナム

そんな風に緊張状態が続く中、最初に発言したのははやてだった。

「シグナム！悠斗君！いったいどうゆことや！？なんで二人が！？」

はやての問いにアルが答える。

「どうにもこうにも、昨日我らをいきなり襲いあそこまで追いやったのはこやつらじゃ！」

「いきなり襲ったって、シグナム一体どうゆうことなん？」

「そ、それは……」

シグナムは言いよどむ

「なんでそないなことしたん！私は言ったやろ。人に迷惑かけたらあかんって。そないなこと望んでないって！」

（アル！なんか様子がおかしいぞ。）

（そのような……此処は事情を聞いてみるか？）

「いったいどういうことなのか俺達も聞いてもいいか？」

「シャマル、ヴィータ、ザフィーラ……話すぞ。」

シグナムの言葉に全員うつ向く。

曰く、はやての病気の原因は闇の書である。

曰く、麻痺の進行を止めるには蒐集しなくてはならない。

曰く、蒐集しなくては何れはやての命を奪う。

曰く、蒐集してはやてを真の主にすれば麻痺は止まる。

それらの事をシグナムが伝えた。

全員が何もしゃべらない中ヴィータが泣きながらはやてに縋るように言う

「蒐集がどんなに悪いことでも、戦いがどんなに辛くても、それでも私はやてと居たかったんだよ！はやてに死んでほしくなんかあったんだよ！」

それは、守護騎士たちの叫びだった。

歴代様々な主たちに物として扱われ、決して人として扱われることのなかった彼らが初めて手にした平和で安息できる毎日。それはどんなものよりも尊くて何よりも大切だった。そして何よりのの中心にいたのはいつだってはやて自身だった。そんなはやて（日常）を何よりも守りたかった。

ヴィータの言葉にはやてが、シャルが、シグナムが、ザフィーラがみんなが泣いていた。

そんな中声上がる。

「蒐集は命に別状はないのか？」

悠斗である。その問いにシャルが答える。

「はい、その方が致命傷、もしくは瀕死の状態でなければ死にいたることはありません。」

その答えを得て満足したのか悠斗は笑顔でこう言った。

「わかった。じゃあ俺たちもその蒐集を手伝おう！」

「「「「「ええ！」「」「」「」」」」

悠斗の言葉に全員が驚く

「悠斗！どういうことじゃ？我らは被害者だぞ？そんな事をする必要がどこにある？」

アルの言葉はもつともだ。

「そうだけど……はやてには助けてもらった恩も有るし、その恩がを返せないのは嫌だし、それに……」

「それに……？」

「目の前に死んでしまいかもしれねえやつがいるのにそれを知らないふりをして暮すのってなんか後味悪いじゃねーか」

「後味悪いって……いや、もういい。汝はなんというか……」

アルは呆れた顔でこちらを見る。

するとその言葉を聞いたはやてが反論しようとする

「でも私はそんなこと「うーるーさーい。ガキが遠慮なんかすんな！、そりゃあ被害にあう生き物たちには悪いと思うけど、お前はどうなんだ？少なくとも俺はお前がこんなことで死ぬなんて嫌だ」つつっ！」

「私だって……私だって死にたくなんかない！もつと生きたいし、もつとみんなと居たい！なんでなん！？なんで私だけこんな苦しい思いせなあかんの！？」

はやての思いがあふれて決壊する。そんなはやてを俺は抱きしめる
「だから今度は俺たちがはやてを助けるために手伝うから……絶対
はやてを死なせたりなんかしないから。」

「悠斗君？」

自分の気持ちを吐き出し、目を真っ赤にしたはやてがこちらをまっ
すぐ見る。そんなはやてに二カツと笑いながら言う

「なんてったって俺とアルは魔を断つ剣だからな。闇の書の闇なん
て俺とアルで、ぶった切っちゃうぜ」

俺の言葉にアルが答える

「うむ。安心しろはやて！主には最強の魔導書である妾『ネクロノ
ミコン』とその主『マスターオブネクロノミコン』である悠斗そし
て無垢なる刃『デモンベイン』が付いておる。」

と、自信満々に答える。

それからはやてが泣きやんだ後俺たちは改めて自己紹介した。

「昨日はいきなり襲ったことを許してほしい。」

「ふん！せいぜい足引つ張んなよ！」

「補助なんかは任せてね」

「よろしく頼む」

上から烈火 鉄槌 湖 盾である。

こうして俺達の闇の書事件は始まった。

こうして始まる……（後書き）

というわけで始めて行きましょう闇の書事件！！
続きがどうなるかなんて作者のイメージの湧き加減と、読者の意見
次第ですんで感想たくさんお待ちしてまーす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2140k/>

ここからいったいどうしろと！

2010年10月17日01時43分発行